

21 周作人研究の現在

——『周作人年譜』の日記改竄をめぐる——

顧 偉 良

1. 問題提起

中国の思想家胡適¹は、中国の思想史において、史料が不完全か、または信用が置けないため、論評の困難さが最も大きな問題の一つだ、と繰り返し指摘している²。この問題は思想史だけでなく、歴史や文学においても同然である。

驚くことに中国国内では、周作人の年譜に掲載された日記の内容を改ざんしている。その内容は、実は、周作人（1885-1967）が、日本軍の北京占領期に北京大学文学院長に就き、各方面からの要請により、華北政務委員会教育督辦（文部大臣、1940年12月～1943年2月）に就任したことに関する重大な歴史的事実である。

周作人は、その就任により、後に「対日協力」の罪で投獄された。毛沢東時代に「漢奸」と見なされ、公民権まで剥奪された。「文化大革命」（1966～1976年）の渦中で悲惨な死を遂げる。その後、再評価され、1990年代以降、中国では自編作品集が300種以上刊行されている。

日本軍占領期、華北政務委員会教育督辦に就任した彼は、思想上に超然とした孤独者であり、中国のほとんどの知識人と異なる存在である。毛沢東時代は、排斥されたものの、ルネサンスの文化精神を受け継ぎ、ギリシア神話と文学、日本古典文学と近代文学の翻訳に専念し、主流思潮に追随せず、一貫して独自性を保った。毀誉褒貶に動じず、名利名誉を気にかけない人でもある。芳名を後世に伝えることを重んじる中国では、異色の存在である。近代中国の歴史的人物のなかで周作人ほど、著しく異なる理解と評価をうけた人は他にないだろう。

毛沢東時代に政治的美化による魯迅の偶像化が氾濫する反面、周作人に関しては、あまりにも寂しいものだった。中国における従来の周作人研究は、適切な評価が欠如している。資料が乏しいため、現在出版された数種類の伝記や周作人の年譜には、誤りが多く見られる。一部分は、作品の引用に費やされて、著者の批評精神があまり見られない。

1 胡適（1891-1962）、清国第一回目の米国公費留学生派遣、コーネル大学で農学を学び、後にコロンビア大学へ転学、デューイに学ぶ。啓蒙思想家、北京大学学長、駐米大使、中央研究院院長などを歴任。

2 『胡適全集』第5巻、安徽教育出版社、2003年、203頁。

中国国内では、周作人に関する文章は多く、彼の評価をめぐる激しい落差が見られる。つまり、周作人の学問に対して肯定的だが、彼の人格に対して否定的である。現在、周作人研究の最大問題は、(1) 作品以外の資料の不足、(2) 既存資料としての日記に対する改ざんである。その改ざんは、編集者のイデオロギーを反映し、客観性と学術性の欠如を意味する。本稿では、『周作人年譜』において改ざんされた日記の部分と、日記の原文とを照合し、その実態を明らかにし、周作人研究における幾つかの問題を検証する。

2. 『周作人年譜』（初版・増訂）の日記改ざん

「文化大革命」の1976年の終息後、周作人研究は遅ればせながら始まった。1980年代に注目すべき数種類の研究資料が出版された。すなわち『周作人年譜』（張菊香主編、南開大学出版社、1985年）、『周作人研究資料』上・下（張菊香・張鉄栄編、天津人民出版社、1986年）、のちに増訂本『周作人年譜1885-1967』（張菊香・張鉄栄編、天津人民出版社、2000年）の刊行である。また周作人の伝記、評論も数多く出版された。

以上の『年譜』所収の周作人の日記が改ざんされているのである。日記には、周作人の督辦職務が解かれた後の活動も記録されているが、『年譜』では、それらの記録はすべて削除されている。これらの問題は偶然に見つかったものである。『年譜』と日記原文を照合する条件が整っていないため、ほかにどのような改ざんと削除があるかは現時点で不明である。

それから30年後の2014年に、新しい研究書『周作人研究資料』上・下（楊楊、徐從輝編、天津人民出版社）と黄開発『周作人研究歴史与現状』（遼寧人民出版社、2015年）が現れた。後者は、30年来の周作人研究史を詳細に紹介し、周作人の「歴史問題」（日本軍への協力を意味）はすでに結論を出され、解決していると述べている³。しかし、周作人の膨大な日記と書簡は未だに刊行されていないため、そこから重要な事実の発見や確認ができるかもしれないのに、そのような結論を出すのは時期尚早ではないかと思う。

改ざんとは、1939年1月12日付の原日記の内容を故意と歪曲したことである。まず、周作人親族が提供してくれた日記原文をみてみよう。

（1939年1月12日）：下午收北大聘書仍是關於圖書館事而事實上不能去當函

3 『周作人研究歴史与現状』第六章参照。

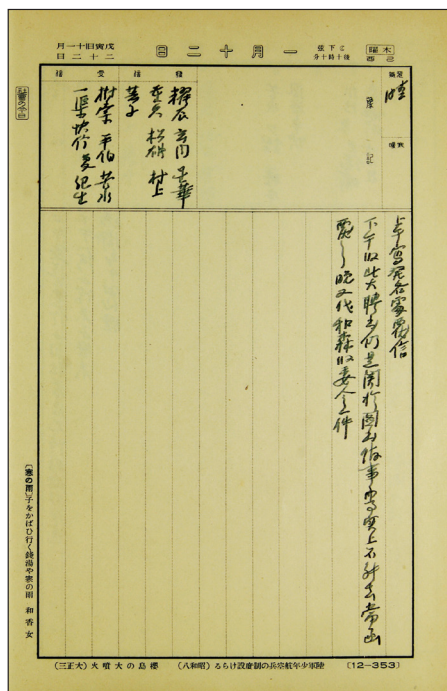


図1 周作人日記より（周作人親族より提供）

る事で、事実上、成らざるを得なかった。」と記している。これは周作人の偽職就任の発端である。）

上記の同じ編者の『周作人研究資料』も、

1939年1月12日、彼は偽北京大学より図書館館長の辞令を受け取った。彼は当日の日記に「午後、北京大学より図書館館長の辞令を受け取り、事実上、成らざるを得なかった。」と記している。⁵

と改ざんを繰り返している。

『年譜』の編者は、改ざん部分の前後に文を付け加えた。つまり、読者にまず前の文を読ませてから改ざんの内容を提示し、さらに後ろの文をもって納得させ

覆之

（午後、北京大学より招聘状を受け取り、図書館に関する事だが、事実、行くべからず之を返信した）

しかし『年譜』では

一月十二日：收伪北京大学任命为北京大学图书馆馆长，即复函接受这一任命，并在当日日记中记：“下午收北大聘书，仍是关于图书馆事，而事实上不能不当。”这是周作人接任伪职的起始。⁴

（偽北京大学より北京大学図書館館長任命書を受け取り、直ちにこの任命を受け入れる。彼は当日の日記に「午後北京大学から任命書を受け取り、やはり図書館に關す

4 『周作人年譜』411頁。

5 『周作人研究資料』上、136頁。

ようという工夫を施している。同じ編者の増訂本『周作人年譜1885-1967』の記載もほぼ同じだが、ただ「任命」を「招聘」（「即复函接受这一聘任」）に変更しただけである⁶。このような巧妙な工夫は驚くべきことである。実際、周作人の日記原文は判読できないほどの難解な筆跡ではなく、無意識の誤読や誤解ではないことが明らかである。

編者の増訂本「編者説明」は次のように述べている。

（略）1985年版の『周作人年譜』は少なからぬ遺漏、また妥当でない箇所ならびに誤りがあった。数十年来、我が国の学術界において周作人に関する研究成果が多数現れ、また周作人と付き合いのある方は多くの資料やそれに関する情報を提供してくれた。そこで、元年譜の土台の上に『周作人年譜』に対する訂正、増訂を加えて、多くの読者にもっと豊富な資料、編年体としての周作人資料——増訂本『周作人年譜』——を提供することができた。

さらに「編者説明」の末尾に、「本書は、1885年から1948年に至る年譜内容に関して、張菊香の編集。1949年から1967年までの年譜内容に関して、張鉄栄の編集」⁷と記している。つまり、増訂本は初版本のミスや誤りを修正しているにもかかわらず、改ざんされた日記の内容はそのまま残っている。それについての言及は全くない。

周作人は書簡を大切にし、日記をつける習慣を生涯もち続けた。文化大革命の時、紅衛兵の家宅捜査に見舞われて、すべての日記と書簡が持ち去られたが、20年後、持ち去られた日記と書簡が北京魯迅博物館に保管されているのを知った遺族は返還を再三要求して、1988年により手元に取り戻したという経緯がある。したがって、『年譜』の編者は、周作人の日記と書簡を保管した北京魯迅博物館の許可がなければ、入手は不可能だったはずである。また日記の改ざんも、編者以外は知ることさえ簡単ではない。

「年譜」の編纂を行う場合、緻密な文献学の方法が必要である。だが、この極めて重要な部分に対する改ざんを含む『周作人年譜』は、中国で周作人に関する唯一の権威的資料として利用されている。周作人研究における学術的公平性の欠如が露呈している。この問題について、年譜編集者と日記保管者の北京魯迅博物館は、社会に対して説明責任を果たす義務がある。それは故人と読者に示すべき

6 増訂本『周作人年譜1885-1967』568頁。

7 増訂本『周作人年譜1885-1967』2頁。

敬意でもある。

『周作人年譜』刊行以来、既に32年間経っている。日記改ざんが学術研究に与えた悪影響は計り知れない。この歴史偽造によって、周作人の「日本侵略への協力」という罪を不動のものにしてしまっている。

3. 周作人年譜に関する書評

年譜の修訂は、年代考証を含む厳密な文献学的方法と系譜学的方法により行う必要がある。微細なものでも、真実を漏らさないように細心の注意を払うべきである。また編者の独立した思考も欠かせないものである。すぐれた伝記や年譜は、一種の思想批評でもあるが、このような作品は中国国内ではあまり見られない。日記改ざんを含む『周作人年譜』は、歴史の検証に耐え得るものだろうか。

増訂本『周作人年譜』刊行後、雑誌『博覧群書』に書評が掲載され、「『周作人年譜』は、学術的価値の高い著書であり、編者は緻密な著述に基づいている」と称賛され、また「たとえ周氏は悪人と思われていても、これは立派な著書であると認めざるを得ない」⁸と付け加えられている。もちろん、評者が日記の改ざんに気づくことはあり得ない。「善でなければ、即ち悪」という価値判断をもつこの評者は、編者と共通認識を持っているようである。中国国内の周作人に関する評価に、これと同じ問題がよく見られる。

周作人は随筆「大乘の啓蒙書」において資料編纂の重要性和学問の客観性を強調している⁹。胡適も随筆「廬山遊記」において、「私は人に教えるべきことがあるが、即ち、学問は平等であり、思想は一貫したものである。一つの小説は、学問において聖賢の伝記と同等の地位を持ち、一つの塔の真偽と孫文遺言の真偽とは、考慮に値する同等の価値を持つ。仏陀と耶蘇が果たして廬山に来たのかを疑問視する人こそ、夏禹は神なのか人間なのかを疑うことができる」と言い、さらに「疑うことにより信じる、考証することにより信じる、十分な証拠を持つことにより信じることができる」¹⁰という方法を提唱している。

また、蔡元培¹¹も胡適の『中国古代哲学史』のために書いた「序文」の中で、「一人の哲学者の生存時代を考証しなければ、彼の思想由来を知ることができない。

8 陳福康「再談『周作人年譜』的成就与不足」、『博覧群書』人民出版社、2001年、第4期、25-26頁。

9 『周作人自編文集 立春以前』河北教育出版社、2002年、101-106頁。

10 胡適「廬山遊記」『胡適全集』第3巻、安徽教育出版社、2003年、193-194頁。

11 蔡元培（1868-1940）、教育家。北京大学学長（1916-1927）、学術と思想自由の校風を確立した。

その遺著の真偽を区別できなければ、彼の実在の思想を提示することもできない。彼の用いる弁証的方法を知らなければ、彼に矛盾した議論があるかどうかを把握することもできない。」¹²と書いている。胡適や蔡元培は道徳的な基準ではなく、学問の公平性を重んじている。『年譜』の編者は先人によって確立された学問の伝統を無視したのである。

周作人評価はさらに様々な問題を抱えている。たとえば、魯迅死後の蔵書売却、魯迅の元妻朱安の生活費をめぐる中国国内の研究者は、周作人の罪を捏造している。『周作人年譜』（初版、増訂本）、『周作人資料研究』（張菊香・張鉄榮編）、許広平『魯迅回想録』（雑誌『新観察』1960年）、黃喬生『八道湾十一号』（三聯書店、2014年）などにおいては、事実と齟齬する内容が多く見られる。内山完造（旧上海内山書店店主）の書簡発見により、その真相がようやく判明した経緯がある。

2015年に発見された内山完造の周作人宛て書簡2通（1944年9月11日、10月18日）¹³は、内山が魯迅の新夫人許広平に頼まれて、周作人に魯迅の蔵書目録の整理を依頼する、と記している。それより前に許広平からの周作人宛ての書簡（1944年8月31日）も残っている¹⁴。一般の研究者は内山書簡の存在を知らず、許広平もその事実を公表していない。だが、内山書簡の発見により周作人の蒙った濡れ衣の真相がわかった。周作人研究は真実を反映する史料を土台にしなければならない。今後、多くの歴史的事実の発見によって、周作人研究の新しい局面が到来するだろうと思う。

4. 周作人研究の方法

歴史的人物の評価は難しい。何を語るかは批評の問題であるが、どのように語るかは方法の問題である。両方とも欠如した場合、周作人の正当な評価は期待できない。『周作人年譜』（1985）と『周作人研究資料』（1986）の刊行順から見れば、年譜がまずあるのは理に適う。しかし事実は違う。ここで初版本『周作人年譜』『後記』の説明文を見てみよう。

一九八一年末、我々は『中国現代文学史資料編』（乙）叢書の中の『周作人研究資料』の任務を受け持った。周作人研究資料を蒐集、編集する過程で、周作人のような複雑で、かつその影響力を無視できない作家に対して、単な

12 『胡適全集』第5巻、安徽教育出版社、2003年、192頁。

13 内山完造の周作人宛て書簡、周作人親族所蔵。

14 許広平の周作人宛て書簡は『致周作人』所収、河南大学出版社、2004年。

る批判や否定をするのではなく、まず詳細な資料を占有し、具体的に彼の功罪を分析し、是々非々をはっきりさせるべきだと痛感した。これを基礎に、彼の歩んだ道を分析、研究すれば、始めて説得力をもつ結果が得られるし、歴史の教訓に学ぶことができる。

年譜の編集に当たって、我々は歴史的唯物主義の原則に従って、周作人の経歴、活動、著述を引用し、彼の生活、政治活動、思想状況、文芸観、創作状況について説明する。これをもって読者に比較的信頼できる確実な資料を提供したいと思う。¹⁵

この「後記」を見るかぎり、年譜編纂の方針は不透明である。本来、膨大な史料を利用するにあたって年譜編纂のチームを立ち上げていれば、史料引用のミスを防ぐことができたはずである。

「資料を占有」という言葉も問題である。それが年譜編者の主な目的だったかも知れない。遺族からも指摘されたが、周作人日記と書簡に記載される多くの人物、重要な出来事は、『年譜』の増訂本に記入されていない。つまり、年譜編者が文献学や系譜学の方法を重要視していないことは明らかである。しかも史実を確認する機能がないまま、日記の重要事項に関わると、編者は軽々しく内容を改ざんしてしまう。実際、『年譜』の初版（1985年）と増訂版（2000年）のあいだに入手できるはずの周作人関係の文献にも触れていない。つまり、増訂版は旧版年譜の焼き直しに過ぎない。また、「是々非々」という言葉は年譜編集の方針のようだが、実際は守られていない。

中国国内の周作人に関する書物の中で、基本的文献さえも入手していないのに、気ままな意見を展開する者もあれば、周作人の人格を否定し、親族を攻撃する者も見受けられる¹⁶。周作人評価に現れたこの現象は、中国の学術史においても稀な事態である。伝統文化の精神を受け継いだはずの中国学界はこのようなことの発生は残念である。

思想家・胡適は「我々は共通の歴史観などを持ち合わせていない」¹⁷と述べたことがあるが、中国国内では、周作人評価に関する「共通認識」が重んじられて、異議申し立ての文章を發表することさえ困難である。また、周作人に関しては攻撃的なイデオロギーの言語のみ残っている場合がある。このような問題を予見し

15 張菊香主編『周作人年譜』「後記」696-697頁。

16 詳しくは黄喬生『八道湾十一号』（三聯書店、2014年）を参照。

17 胡頌平編著『胡適之先生年譜長編初稿』第5冊、台北聯濟出版、1984年、1933頁。

たように、周作人は「翻訳と批評」（1920年）で、「中国では各種の批評は人身攻撃に陥りやすく、これは極めて卑劣な行為であり、改めるべし」¹⁸と述べたことがある。

周作人は、20世紀の新文化運動を推進した文化人である。それは新しい思想が芽生え、周作人の最も活躍した時代でもある。新文化運動の主な精神は、「国故整理」と「新陳代謝」であり、科学的方法の確立を重要視し、伝統文化に果敢に挑戦するものである。彼は、日本文化を多角的に批評している。たとえば、「日本文化を談じるの書」（1936年）で、日本の文化と現実との格差についてこう語っている。「文化とは、その民族の最高表現である。往々にして一時的であり永遠ではなく、少数であり非全体である。故に文化の高尚さと現実の醜さとは一致していない。文化を研究するものは、こういった事情に対して為すすべがないと感じていながらも愉快だとは思わないだろう。例えば、源氏物語、または浮世絵を鑑賞できる者は、柳条溝¹⁹、満州国、蔵本失踪²⁰、華北自治²¹、密輸などを見たら、醜惡愚劣だと思うだろう。教養のある日本の芸術家も同様、そういった事は真善でもなく美でもないと思うだろう」²²という辛辣な批評を下した。このような文化と現実との隔たりは、中国の歴史についても言えるし、歴史人物の評価に関してもいえる。周作人評価において突出した問題は、批評の思想がまだ確立していないことである。これからは原始資料、批評言語、研究体系、根源的思想を重視し、実証を研究方法とし、学問の公平を求めるべきだろう。今後、周作人宛ての日本文化人の書簡の分析と新年譜の編纂は、周作人研究の体系の確立には重要な一環だと思う。

5. 周作人の残してくれた課題

1950年代以降、周作人は沈黙の時代に入り、一家は苦境に立たされた。周作人の息子（周豊一）も「右派」のレッテルを貼り付けられ、生活の資金が断たれた。現存の書簡で知る限り、松枝茂夫、安藤更生、その他に香港、シンガポールの友

18 『周作人自編文集 談虎集』河北教育出版社、2002年、22頁。

19 柳条溝事件は、1931年9月18日関東軍の謀略が起した、満州事変の発端となる鉄道爆破事件である。

20 蔵本失踪とは、1934年6月8日、駐南京日本総領事館書記生蔵本英昭の失踪をめぐって、中国人に拉致されたと日本側が中国に抗議して、第三艦隊旗艦出雲を南京近くまで遡上させた事件。

21 1935年5月以降日本軍による北支五省の「華北自治運動」を指す。「華北事変」とも言う。

22 「談日本文化書」『周作人自編文集 瓜豆集』河北教育出版社、2002年、53頁。

人（曹聚仁、羅孚、何冰然、胡士方、鮑耀明等）、国内の友人が、様々なルートを通じて周作人を援助した。一方、苦境に立たされた周作人自身は、彼よりもっと生活苦に陥った人たちを絶えず助けていた。

例えば、数多い知識人（黄萍蓀、周冠五、徐淦、張次溪、馮元亮、顧承運等）を経済的に援助し、また一般労働者をも助けた。もし1950年代以前の人数を入れれば、もっと多くなる。これらの国境を越えた国際的な生活援助、また自国人同士の助け合いは、感動的で豊かな人間性に満ち溢れる。今後、新たな周作人伝記、年譜長編を編纂する時、これらのことを記載すべきである。

周作人は1949年7月4日に政府要人に手紙を出して、歴史問題の解決を依頼したが、認められなかった²³。その後、公民権まで剥奪され（1953年12月）、「漢奸」文人と名指され、すべての評論活動を停止させられた。それ以前の著作の貸し出しも認められなかった。周作人は精神面で屈辱に耐えて、翻訳作業に没頭した。強靱な思想なしにはできないことであろう。一方、生活上の待遇は些か改善され、新著出版に関しては「周遐寿」の署名で許可された。また新聞の文章掲載も可能になり、海外への投稿も黙認されるようになった。

1956年に『中国青年報』に周作人の文章が発表された後、詩人・李白鳳氏は、周宛ての手紙に「中国青年報に発表された文章を既に拝見、文壇の重鎮が再起することで迎合する輩は群がってくるかも知れない」（1956年8月23日付）²⁴と書いたが、結局、李の望むような結果にはならなかった。毛沢東時代の周作人の境遇は極めて困難なものであった。周作人が晩年に経験したことのすべては、歴史的に見ると、近い者は孔融、李贄、遠い者ならば、ソクラテス、セネガーなどの哲人が経験したことであった。過去の業績が黙殺され、文人としての待遇は最低限なものしか与えられなかった。亡くなるまでに公民権が回復されることはなかった。

彼は精神面でどんな打撃を受けても、社会に対する関心は些かも変わることなく、こつこつと日本文化、または戦後文学の書籍を読み漁った。数百万字にのぼるギリシア神話・ギリシア古典文学、日本古典文学・近代文学の翻訳を行った。中国翻訳史上におけるその功績が埋没することはない。周作人は、かつて「新ギリシアと中国」の一文において、「ギリシア人はある特性を持っており、それは先祖から伝わってきたものである。即ち、生命を求める欲望である。一時余命を保つことなく、美を求める健全な充実した生活のスタイルである」²⁵と書い

23 政府要人宛ての手紙は『周作人散文全集』第9巻（広西師範大学出版社、2009年）所収。

24 李白鳳の周作人宛書簡（周作人親族所蔵）。

25 『周作人自編文集 談虎集』河北教育出版社、2002年、312頁。

ている。この生の欲望と美への追求とギリシア神話・古典等の翻訳偉業は、晩年の旺盛な精神活動を保たせた。周作人の引用した「エリスの言葉」に「世界だけあるのは不十分で、伝統もなくはならない。また生命だけあるのも不十分で、活動がなくはならない」²⁶という言葉は彼の思想と精神を物語る。

「中国は過去において専制制度が敷かれて、文化界は麻痺状態に陥り、その間に存在するのは劣悪な生真面目さと俗悪な諧謔のみ」²⁷と鋭く指摘したことのある周作人は、晩年にただ1冊の回想録（『知堂回想録』上・下、香港三育図書文具公司、1970年）を書いたにすぎない。卓越な文芸批評家としての彼は消えてしまった。目下、中国国内の批評界では、周作人のような文芸批評家がいなかったため、寂しいものである。先駆者としての周作人は、後世に多くの課題を残してくれた。

最後に、再び思想家・胡適の語った言葉を引用しておく。「文化史研究者の主な仕事は、やはり無数の細かな問題の中から緻密な解答を得るしかない。文化史の完成は、このような緻密な作業の努力によるよりほかはない」²⁸という言葉は、周作人研究にとって重要な指針となる。日中戦争のはざままで過酷な運命を体験した周作人の思想行為を理解するのは容易なことではない。松枝茂夫、飯倉照平、木山英雄は鼎談の中で、日中戦争期の周作人について語りながらも、周作人の思想と中国思想上の問題との関連性に特に関心を示さなかったようである²⁹。これは周作人研究においてもよく見られることである。多くの人は傍観者の目でその問題を見ているだけである。周作人の中国文学への貢献、日中文化の交流への功績を客観的に研究、評価することは、文化史の完成にとっては不可欠なことである。

26 『周作人自編文集 雨天的書』河北教育出版社、2002年、89頁。

27 「餅齋的尺牘」（1945）、『周作人自編文集 過去的工作』河北教育出版社、2002年、65頁。

28 胡頌平編『胡適之先生年譜長編初稿』第5冊、台北聯濟出版、1984年、1933頁。

29 松枝茂夫、飯倉照平、木山英雄「〈聞書〉紹興、魯迅、そして周作人」、『松枝茂夫文集』第2巻、研文出版、1999年、252-276頁。